

したトマス以後の発展で明らかにされたことは、すでに13世紀におけるアリストテレスをめぐる論争の際、自然哲学や形而上学の問題以上に、人間精神とその自由の本質と基礎に関する問いがより大きな問題となっていたということである。この問いはなるほどアリストテレス受容によって引き起こされたが、本質的にキリスト教の中心にある問題、すなわち被造物とくに人間の理性の独立性と神の存在への分有の関係いかん、という問いに結びついている。トマスにとって能動知性は神的真理の光にあずかる個別の人間の自然の能力であるから、彼はそれによって自立的に哲学することを基礎づけたのである。グラープマンはこれをトマスの画期的な業績として強調している。ところで自由なる哲学的思惟は、神の真理に根ざすことを自覚していることにより、神学との対話は打ち切られてはいないのである。このような自立的で世界に開かれた、しかし極めて深く信仰に結びつけられている思想は、まさにグラープマン自身の著作の相貌でもある。このように研究対象と同質の思惟の態度を持しているがゆえに、グラープマンの著作は、今日の中世思想研究にとってもいぜん信頼に足る手引であり、汲み尽し難い宝庫となっているのである。

(木口須美子訳)

Goulven Madec : *Saint Ambroise et la Philosophie*,
Paris 1974, pp. 449

——最近の Ambrosius 研究の動向と関連して——

宮 谷 宣 史

最近のアンブロシウス研究の一動向を知る上で次の二つの文献はよい手がかりを与えてくれる。*Ambrosius Episcopus. Atti del studi ambrosiani nell XVI centenario della elevazione di sant' Ambrogio alla cattedra episcopale*, Milano 2-7 December 1974, a cura di G. Lazzati, vol. I e II, Milano 1976.

本書は表題のごとく、アンブロシウスのミラノ司教就任1600周年記念として1974

年にミラノで開催されたアンブロシウス研究国際学会での成果を収録したものである。2冊で1000余頁、19の研究報告と16箇の研究発表を含む。前者のため用意された主題は、1. 文学批評の問題、2. 歴史および考古学的問題、3. 釈義と神学問題、4. 後代の伝統におけるアンブロシウス、で各部門に4～8名が当たっている。四主題をみてまづ気付くことは、アンブロシウス研究の主要テーマの一つ、教会と国家の問題がないこと。研究発表の方でも教会政治家としてのアンブロシウスを対象としている者はいない。しかし、これはおそらく偶然で、この主題が重要でなくなったからではなく、むしろ学会企画者の学問的関心によるものであろう。四主題は形式上では一般の思想家研究の場合と類似した設定とみなしうるが、内容面には新しい傾向を感じる。特に第一主題に。ここで講演を担当した人々の名前をみると、イタリアの G. Billanovich と M. Ferrari、オランダの Chr. Mohrmann、フランスの J. Fontaine と P. Courcelle である。最初の2人については分らないが、他はいずれも古典語および古代（キリスト教）文学の専門家である。彼らはアンブロシウスの作品の文献学的問題を論ずるのみではなく、作品、用語、文体などを手がかりにその思想の解明を遂行している。クルセルは *Recherches sur saint Ambroise, "vies" anciennes, culture, iconographie*, Paris 1973 の著者らしく、アンブロシウスの中世紀のイコノグラフィを取り上げ、その古い資料との関係を広い視野から問題としている。G・マデックのアンブロシウス研究もこれらの人々の関心と方法を共有していると言えよう。

釈義・神学問題の部でも従来重視されてきた道徳神学、マリア論などは顔を出さず、F. Frede は聖書引用の問題を扱い、J. Pépin は principium（この語はギリシア哲学と聖書に共通している）の解釈問題を論じている。R. Cantalamessa はアンブロシウスの神学的立場を当時の神学論争との関連で明らかにしようとして試みている。ここにかがえる関心の在り方と研究方法もマデックの本のもつ傾向と同じものである。

二番目の文献は *Theologische Realenzyklopädie*, Band 2（1978年刊）所載の項目 Ambrosius である。執筆者は E. Dassmann。ダスマンはアンブロシウスの神学を叙述するに先だち、その Quellen の問題を取り上げ、彼と新プラトン主義との関係に言及する。そして、この主題は以前からしばしば指摘され、また両者の

関係がある程度確認されながら、いまだ根本的な究明がなされていないものである。ダスマン自身はすでに *Die Frömmigkeit des Kirchenvaters Ambrosius von Mailand*, 1965というすぐれた書物で、この教父の初期著作にみられる哲学者たちの遺産を確め、またその神観の Quellen としてフィロン、新プラトン哲学、ギリシア神学を挙げている。しかし、いずれの箇所でも概観を与えるにとどまり、アンブロシウスとギリシア哲学の関係の総括的検討は課題として残されている。

以上の二文献において Quellen の問題に注意が向けられているのは興味深い。これは方法論としては特別新しくはないが、アンブロシウス研究への適用という点では一つの新しい動向として捉えられると思う。クルセルの業績を知る者にとっては、この方向でアンブロシウス研究が盛んになることは予想していた事態である。しかし、アンブロシウスの著作全体をこの視点から論じた研究はまだ現れていない。この残された困難な課題と取り組んだのがマデックである。

マデックは序論で著作の意図と課題を明らかにする。まず、アンブロシウスの哲学（哲学者）への依存関係、次に彼の哲学観、第三に、教父の哲学に対する評価の問題。以上3点をテキストに即して究明することが本書の意図である。そこで、これらの主題をめぐる従来の研究のなかから、特に S. V. Rovighi, E. Gilson, P. Courcelle に留意する。ロヴィギはアンブロシウスと哲学の関係を対立的にみない。ジルソンは司教は哲学に反感をもっていたと考える。クルセルによるとアンブロシウスはプロティノスに愛着をいだいていた、そしてもし *De philosophia* が残存していたら両者の関係はより鮮明になろう、と言う。このような研究史的状況をふまえたうえで、マデックはテキストの検討に着手する。その前に、アンブロシウスにおける哲学という表現を現代的な概念として狭義に受け取ることをさげ、当時のあいまいな語感（たとえば神学と明確な区別のない）に従うことの大切さを指摘することを忘れない。

マデックはアンブロシウスの著作にみられる哲学に関するすべての箇所を吟味するが、そのさい、単にこの用語の使用された部分のみならず、哲学者はもとより哲学的主題を扱った章句も考慮する。その上さらに紛失した文書 *De sacramento regenerationis sive de philosophia* の Testimonia を集め、Fragmenta をたよりにその内容を考察していく。教父の哲学観、特にその新プラトン主義を知る上で本

書は不可欠な内容をもつとマデックは考えるのである。

ところで全部で180箇所 (Testimonia は184まで集めてある) 以上のテキストを調べ解釈するのは容易でない。マデックは作業を三段階に分けてすすめる。つまり、第一章ではアンブロシウスの作品のなかで哲学にふれている箇所を調べ、彼の哲学への依存関係を明らかにする。第二章では彼の哲学についての情報はどのようなものかを探り、そしてその価値を問う。第三章では司教の聖書観とキリスト教理解との関連でその哲学観、特に哲学に対する評価がいかなるものかを考察する。そして以上の作業から失なわれた文書 *De philosophia* の内容のまとめと注釈を試みる。

マデックの研究の特色は研究史の検討とテキストの探索を丹念に行っている点にあるが、特に注目したいのはその方法論である。それは *Quellenforschung* と呼んでよかろう。彼はアンブロシウスの思索や表現からその *Quellen* を探し、両者のテキストを並記、比較していく方法をとる。そして、依存関係を確認していく。クルセルがアウグスティヌスの著作とアンブロシウスの説教の関係を、M. Testard がアウグスティヌスとキケロを、H. Hagendahl がアウグスティヌスとラテン著作家をテキストの対応関係をもとに論じたのと同じ方法である。マデックがクルセル、フォンテヌ、A. マンドウズ、ベパンらの指導の許に本書をまとめ、パリ大学に学位論文として提出 (1972年) していることを思うと、彼の立場の背景が分る。もちろん、人脈上からのみでなく、すでにみたごとく研究史的にも方法論の面でも、特に主題そのものさえこれらの人々と傾向を同じくする流れにあるといえよう。なおマデックの学問的才能が評価されている一例として、彼が *Bibliothèque Augustinienne*, vol. 6 の新版 (1976) を担当していることに言及しておきたい。

ところで、クルセルはくり返し本テーマを扱っており、また先に取り上げたミラノの学会報告書の中ではマデックの研究に言及し、資料問題の重要性を述べている。ミラノの司教と哲学の関係は F. H. Dudden の発言で問題にされてきたが、それ以前に、たとえば J. E. Niederhuber が *Exameron* の独訳 (1914) にふした序論の中で哲学に対するアンブロシウスの立場は肯定と否定の二面性を示していると論じているし、最近では A. Warkotsch, *Antike Philosophie im Urteil der Kirchenväter*, 1973 によっても同様な理解が確認されている。この意味で当主題

は新しいものではないが、常に関心を呼び起すものである。それは、一方で、ノラのパウリヌスが、*verus philosophus Christi* になるためこの世のものをないがしろにし、漁夫の足跡に従った (*Vita beati Ambrosii*, 7) と描写している司教が、他方で、*Philo christianus* とか *Ciceronius* と呼ばれているからである。四世紀末のミラノにおける新プラトン主義者と親しい交流を有し、A. Solignac の言う「ミラノのサークル」の中にいたアンブロシウスのプラトン主義はどのようなものであったのか、これを *Quellenforschung* によってある程度明らかにしうるのか。彼はキケロ、オリゲネス、バシレイオスなどは読んだが、プロティノスとポリュフィリオスはどうか。さらに失なわれた文書 *De philosophia* の内容、特にそこにみられるアンブロシウスの哲学観はどのようなものか。このような関心をいだきながら読むとき、この大著は学問的につきることのない興味と刺激を与えてくれる。

紙幅がつきたのでマデックの結論を簡単に書きそえて終りたい。著者は言う、哲学の問題はアンブロシウスの著作と精神にとって周辺的であると。彼は特にキケロやプラトンを読みそこから影響を受けているが、聖書を真理の唯一の源泉とみなすゆえに、教理に関するさいには両者を比較し、哲学を批判する。このような事態のゆえに、マデックは「アンブロシウスの哲学」を論ずることが出来ず、両者の関係を検討するにとどまらざるをえなかったといえよう。*Testimonia* をもとにこの点につきさらに考察することが読者の課題であろう。

山田晶著『在りて在る者』

1979年2月、創文社、xxvi+408頁

泉 治 典

本書は「在りて在る者」をめぐるアウグスティヌスとトマスの解釈を主とし、そのほかに「無からの創造」「神と世界」「非有のアイデア」「自然神学」の4篇を収めている。その多くは最近10年間の作である。評者はそのつど読ませていただいて